

人気アーティストの勃起管理も私のお仕事です！
——有能マネージャーの秘密任務♡

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

バンド歴は、すでに十数年。

彼らは世間から「中堅の人気バンド」と呼ばれるほどの実績を積み上げてきた。しかし、その中心にいる啓司の心は、ここしばらく空虚なままだった。

リハーサルをしても、レコーディングをしても、どうにも気力が湧かない。

観客の歓声さえ、遠い雑音のようにしか聞こえず、苛立ちだけが募っていった。

その苛立ちはやがて周囲に向けられ、スタッフに当たり散らすことも増えていた。自分が煙たがられていることを、啓司自身も誰より理解していた。

そんな折、新しいマネージャーが彼のもとについた。

名は森山美桜。

二十代半ば、どんな時も笑顔を絶やさない女性だった。

ピリピリとした空気を漂わせる啓司を前にしても、美桜は眉ひとつ動かさず、

「はいはい、啓司さん、大丈夫ですよん」

と軽やかに受け流す。

普通なら緊張で固まる場面さえ、彼女は逆に柔らかく変えてしまう。

その存在は啓司にとって、不思議で仕方がなかった。

マネージャーの仕事は、世間が抱く華やかなイメージからは程遠い。

スケジュール管理はもちろん体調管理や薬の準備、時にはファンサイトの不具合への謝罪まで担う。

責任ばかり重く、報われることは滅多にない。

だからこそ、長く続けられる者はほとんどいなかった。

しかも啓司は、決してマネージャーに優しい態度をとる人間ではない。

これまで何人もが途中で仕事を投げ出し、去っていった。

美桜も同じだろう。

すぐに嫌気が差して姿を消すはず——当初、啓司はそう思っていた。

ところが、時間が経つにつれ、啓司の視線は自然と美桜を追うようになっていた。どんなにミスをしても美桜はしょんぼりと落ち込むのではなく、必ず真っ直ぐに、「次から絶対にミスしないように、気をつけます！」と答える。

その言葉が決して口先だけでないことは、近くで見ているとすぐに分かった。気づけば、啓司は彼女を観察していた。

小柄で華奢な体つきは、可憐そのもの。

食事のときにもぐもぐと頬を動かす仕草は、小動物のリスを思わせる。

だが、その無邪気さからは想像できないほどに彼女は力強く動き回り、全力で声を張り上げる。

黒目がちな瞳は長いまつげに縁取られ、幼きを残した顔立ちを際立たせていた。笑えば、頬に小さなえくぼが浮かぶ。

華奢な身体のだこに、あれほどのエネルギーが秘められているのか――
啓司はそう思わずにいらなかった。

ある日のこと。

啓司の自宅兼事務所で、森山美桜がケーブルの束と格闘していた。

ぐちゃぐちゃに絡まった配線を必死にほどき、最後にパチツと音を立てて、接続が成功すると美桜はぱっと顔を上げて笑った。

「……ああ、やっとできた！ これ、複雑すぎますって！」

その笑顔は子供のように無邪気で、眩しく見えた。

啓司の脳裏に、前任のマネージャーの姿がよぎる。

「もうできません、こんなのマネージャーの仕事じゃありません！」

そう言って投げ出した顔。

それに比べ、美桜は根性がある。強い。

思わず啓司の口元が緩んだ。

「……あー、もう無理かと思いました！ ホツとしたらお腹空いてきたあ」

「……なに、食いたいもんあるなら言えよ」

気まぐれに返すと、美桜は目を輝かせて即答した。

「え、いいんですか？ じゃあ焼肉食べたいですっ！ 芸能人御用達って噂の、

叙々苑に行きたいです！」

あまりに素直な反応に、啓司は思わず吹き出してしまふ。

「だって、啓司さんお金持ちだから高くてもいいかなって！」

おどけたように首を傾げる仕草が、妙に愛らしかった。

「……ははっ、いいよ。もちろん連れてってやる」

「やったあ！ 啓司さん、ありがとうございますー！」

弾んだ声を響かせながら、美桜は車に乗り込んだ。

「嬉しいなあ……何食べようかな！ お店のお肉、全部食べちゃおうかな！」

ハンドルを握りながら無邪気に笑う横顔を助手席から眺め、啓司の胸の奥には久しく感じなかった温かさが広がっていく。

テーブルいっぱい肉が並ぶと、美桜は目をきらきらさせ箸を握った。

「すごい！ いただきまーす！」

元気よく宣言し、遠慮なく大口を開けて肉を頬張る。

「おいしい……！ うわ、こんな分厚いのにやわらかい……！」

もぐもぐと噛みしめながら熱さに口元を手で扇ぎ、次の肉へと箸を伸ばす。

その無邪気さに、啓司の口元は自然と緩んでいた。

「何でも食えよ。ほら、この厳選特上ロースってやつもいけよ」

「……っ！」

口いっぱい肉を詰めたまま、美桜が目丸くする。

「と、特上!! そんな特別なのは頼んじゃダメって母に言われてました……」

そう言いながらも、瞳はすでに輝いていた。

「でも……いいですよ？ 啓司さんお金持ちだし、この間のツアーだって黒字でしたもんね。……食べちゃおう！ すいませーん！」

申し訳なさそうに笑いつつも、元気いっぱい店員を呼ぶその姿に、啓司は腹の底から笑った。

「ははっ……！ ははははっ！」

こんなふうに笑ったのは、啓司にとって一体いつ以来のことだっただろう。

売れて以降、彼の周囲にいるのは気を遣う人間ばかりだった。

誰もが顔色をうかがい、言葉を選び、従順に迎合してくる。

本音でぶつかってくる者など、ひとりもいなかった。

それなのに、美桜は違った。

肉を頬張りながら無邪気に笑い、ためらいもなく「特上！」と声をあげる。

その正直さが、啓司の心を大きく揺さぶっていた。

タレで濡れた唇を輝かせ、「おいしい、おいしい」と夢中で頬張る彼女。

その姿を見ているだけで、啓司の胸の奥にじんわりと温かさが広がっていく。

ふと、美桜が顔を上げた。

「そういえば、啓司さん。今日まだ薬飲んでないですけど、大丈夫なんですか？」

「ん……今日は調子いいから、飲まなくても平気だ」

「じゃあ、お酒飲んだらいいじゃないですか！ 私がどうせ運転しますし。はい、

啓司さん、何飲みます？」

楽しみにメニューを差し出す美桜に、啓司は少し照れ笑いを浮かべる。

「じゃあ……ビールでも」

グラスを受け取り、一口。冷たい液体が喉を滑り落ちていった。

「……うまいな」

久しぶりに味わうビールは、ただのアルコールではなく、体の奥に懐かしい生気を呼び戻すようだった。

美桜はその様子を見て、いたずらっぽく口元をほころばせる。

「いいなあ……私が運転じゃなかったら、一緒に飲めるのに」

その笑顔を眺めていると、啓司の胸の奥で長くこわばっていた何かが、静かに溶けていくのを彼自身が確かに感じていた。

「あー……お腹いっぱい。ほんと美味しかったです。ごちそうさまでした！」
帰りの車中、運転席の美桜が上機嫌に声を弾ませる。

横顔は焼肉を夢中で頬張っていたときと同じで、無邪気そのものだった。

助手席に座る啓司は、酒のせいもあってか、その姿から目を逸らせなかった。

シートベルトに押し潰されて強調される胸の谷間。

カーブを曲がるたびにふると揺れる膨らみ。

その下に続く、きゅっと締まったウエストと張りのある尻のライン。

——本当に、いい身体をしている。

心の中でそう呟いた瞬間、喉がかすかに鳴った。

ここしばらく体調の不調を理由に「年齢のせいだ」と自分を納得させていた。

だが、横に座る美桜を見ただけで久しく感じなかった熱が股間に集まってくるのをはっきりと自覚した。

気づけば、言葉が口をついていた。

「……なあ。美桜って、俺のこと……怖くないのか？」

「え？ 怖い？ ……それは別に……」

美桜は軽く笑い、言葉を逃すようにごまかした。

「……なんだよ。はつきり言えよ」

促されると、彼女はちらりと横目を送り、にやりと笑った。

「怖いどころか……赤ちゃんみたいだなんて。赤ちゃんだと思って接してまーす」

「はあ？」

啓司の声が裏返る。

「だってそうじゃないですかあ。機嫌が悪くなったらすぐ顔に出るし、都合が悪くなると怒鳴るし。自分の気持ちをコントロールできないのは赤ちゃんと一緒です」
そう言って、ハンドルから片手を外し、啓司の方をちらりと見てにこっと笑った。

——その瞬間、股間に重たい衝撃が走った。

勃たないのが当たり前になっていたはずなのに。

無邪気に笑う美桜を見た途端、忘れていた衝動が啓司を呑み込もうとしていた。

車がガレージに滑り込む。

「はい、着きましたよ。じゃあ、お疲れさまでした、啓司さん」

無邪気な声を耳にしながら、啓司はしばらく黙ったまま動けなかった。

ドアに手をかけながらも降りる気配を見せない彼を美桜が不思議そうに覗き込む。

「どうしたんですか？」

「……その、ちょっと機材の調子がまだ悪いんだ。直してもらえないかなー……」

自分でも苦しい言い訳だと分かっていた。

ただ、帰ってほしくなかっただけ。

けれど、そんな下手な嘘を知ってか知らずか、美桜はにこっと笑った。

「お、いいですよ。機材ですね？　じゃあ、ちよつと見ましょうか」

あつさりと承諾し、啓司とともに家の中へ。

リビングに入ると、彼は思いついたように言った。

「そうそう、ここからも配信できるようにしたいんだ。キッチンの方までケーブル引いてほしい」

「はいはい、任せてください」

笑いながらケーブルを手を取った美桜は、そのまま床にしゃがみ込む。

大きく突き出された尻と、Ｔシャツ越しに揺れる乳房が視界に飛び込んできた。

配線に手を伸ばすたび、美桜の腰の丸みと尻の動きが強調される。

その光景を目にするたび啓司の呼吸は浅くなり、衰えたと思っていた欲望が確かに蘇っていくのを感じていた。

無防備な仕草ひとつひとつが、下半身に熱を集めていく。

「はい、できましたよ。啓司さん。これでもう大丈夫です」

ケーブルの接続を終え、美桜がにこつと笑った。

荷物をまとめながら振り返ると、悪戯っぽく口を開く。

「……啓司さんって、私のこと電気屋さんだと思ってますよねー？」

おどけるように肩をすくめ、じゃあ、お疲れさまでしたと軽やかに玄関へ向かう。
だがドアを開けた途端に冷たい風が流れ込み、大粒の雨が叩きつけてきた。

「うわっ……すごい雨……」

目を丸くして外を見上げる美桜。

彼女は自転車通勤だ。

この豪雨では帰れるはずがない。

「……スタッフルーム、泊まっていけばいいじゃん。明日も朝から仕事だし」

啓司の提案に、美桜はほんの一瞬考えたあと、あっけらかんと笑った。

「そうですね。明日は朝七時集合でしたよね。ここなら寝坊しないし、いいか」
周囲を見回した美桜は、棚に積まれたツアーTシャツを指差す。

「じゃあ、これのSサイズ借ります。これ着て寝ちやおうっと」

何でもないように言うその声に、啓司の理性はぐらりと揺らいだ。

Tシャツ一枚に包まれた美桜の姿を想像しただけで、胸の奥に熱が込み上げる。

シャワーの湯を頭から浴びても、体の奥の熱は冷めるどころか増していった。

長いあいだ反応すらなかったはずの場所が、今は硬さを取り戻している。

もう二度と勃たないと諦めていたのに——気づけば、力強く勃起していた。

その事実には、一番驚いていたのは啓司自身だった。

閉じたまぶたの裏に浮かぶのは、さきほどの美桜の姿。

ケーブルを直そうと前屈みになった拍子に、シャツ越しでも形の分かる尻の丰满な曲線が突き出され、布の下で揺れていた。

思い出しただけで、股間がさらにぎゅうつと膨れ上がっていく。

「……っ、くそ……どうしたんだよ俺……」

壁に片手をつき、もう片方の手で熱を帯びた自身を握る。

触れた瞬間、びくんと大きく跳ね上がった。

「美桜……」

名前を吐き出すと同時に、腰が震える。

扱くたびに、ぐちゅ、ぐちゅ、と淫らな水音が浴室に広がった。

シャワーの雫と先端から滲み出す液が混じり合い、さらに快感を強めていく。

「……くっ……」

手の動きは止まらず、次第に速度を増していく。

腰は突き上げられるように前へせり出し、足の裏に力がこもった。

そして、新たなイメージが頭を満たす。

自分の前に膝をつき、潤んだ瞳で見上げながら、肉棒を口に含む美桜の姿。

「啓司さん……♡ もうガチガチですね、舐めちゃお♡」

唇で咥え込み、舌で裏筋をなぞり、涙目で必死に奉仕する幻影。

「んっ……ああ、美桜……っ！」

指先は止まらず、先端を擦るたび背筋が痺れるように震えた。

腰が勝手に突き出され、啓司の頭の奥で白い閃光が弾けた。

「……うつ、……だめだっ……！」

腹の底から突き上げる熱。

逃げ場を失った衝動は、一気に噴き出した。

白濁がシャワーに混じって床へ叩きつけられ、流れ落ちていく。

「はあっ……はあっ……」

荒い息を吐きながら、啓司は壁に額を押しつけた。

「……最低だな、俺……」

年下であり、マネージャーであり、本来なら信頼すべき相手。

その美桜の姿を思い浮かべながら、自らの手で果ててしまった。

……なのに。

この浴室で美桜が裸になってシャワーを浴びた。

その事実を意識した瞬間、再び股間に血が集まっていく。

「……嘘だろ……まだ勃つのか……」

手を離せない。

目を閉じれば、脳裏に浮かぶのは湯気に濡れた美桜の裸身。

白い背中を見せ、腰を突き出すように立ち上がる姿。

その腰を両手で掴み、後ろから突き上げる感覚。

張り詰めた肉棒がぬるりと美桜に沈み込み、狭い膣内がぎゅっと絡みつく。

「け、啓司さん……♡ もっと♡ もっと♡ いっぱいほしいの♡」

脳内で甘い声が響いた瞬間、啓司の腰は狂ったように動き出した。

肉を扱う手も、亀頭を擦る親指も止まらない。

「美桜……っ、美桜……っ！」

腰を突き上げる動作に合わせてしごきながら、想像の中で裸身を抱きしめる。

乳房を揉み潰すように握り込み、何度も奥まで突き上げていた。

二度目の衝動は、一度目よりもさらに激しい。

睪丸が引き絞られるように縮み、腹の奥から灼けつく熱が迸る。

「くっ……！」

白濁が弾け飛び、シャワーの流れに混じって消えていった。

その量に、自分でも驚くほどだった。

壁に凭れかかり、啓司は荒い息を吐きながら天井を仰ぐ。

罪悪感と背徳感が胸を締め付ける。

だが、体の奥ではまだ熱が燻っていた。

「……美桜……」

その名を口にするだけで、再び熱が戻ってきそうになる。

恐怖すら覚えながら、それでも止められない自分を実感していた。

翌朝、目が覚めた瞬間、頭の奥に鈍い痛みが残っていた。

二度もシャワー室で抜き、ようやく眠りについたはずだった。

それでも啓司の体の芯は、重く熱を帯びたままだった。

——美桜の名前を呼びながら果てた。

その記憶が甦るだけで、胸の奥がひどく苦しくなる。

罪悪感に押し潰されそうになりながら、彼は階下のリビングへ降りていった。

「おはようございます、啓司さん」

台所から明るい声が響く。

振り返った先で、美桜がキッチンに立ち、グラスへトマトジュースを注いでいた。

Tシャツの裾から伸びる白い脚が目に入り、啓司の心臓は大きく跳ねた。

「……………ああ。おはよう」

声が掠れる。昨夜の妄想が尾を引き、まともに目を合わせることができなかった。当の本人はそんなことなど露ほども知らず、にこにこ笑みを浮かべている。

「……啓司さん、はい、どうぞ」

差し出されたのはサラダとトマトジュース。

その横で、美桜は手にしたバナナを大口で頬張っていた。

「んーと、今日は音声さんと衣装さんの打ち合わせでしたよねえ」

無邪気な声とともに、白い歯で果肉を噛みちぎる。

その口元を見た瞬間、啓司の脳裏に昨夜の映像が閃光のように蘇った。

——膝をつき、潤んだ瞳で見上げながら唇で啜え込む美桜。

舌で裏筋をなぞり、涙目で必死に奉仕する幻影。

目の前でバナナを頬張る仕草と、昨夜の淫靡な光景とが重なって見える。

「……っ」

喉が鳴った。

それと同時に、股間が熱を帯びて膨れ上がっていく。

（……おい、中学生かよ……！）

驚愕に目を伏せた。

さきほどこまで罪悪感に頭を抱えていたはずなのに美桜の口元を見ただけで下半身が勝手に反応している。

衰えが、今はむしろ若い頃以上に敏感になっているかのようなだった。

「……そ、そうか、衣装さんも来るんだったな……」

乾いた声で返し、トマトジュースをひと口含む。

（……俺は、どうなっちまったんだ……？）

昨夜二度も果てたばかりだというのに、今またすぐに勃起してしまう。

驚きと情けなさに胸を締め付けられながらも、昂ぶる熱は消えてくれなかった。

第二話

おかしいことは分かっていた。

だが、もうどうしようもなかった。

森山美桜と一緒にいると、ほんの些細な仕草――

髪を耳にかける動作や、ペットボトルを口に運ぶ仕草、笑ったときに揺れる胸元。そのどれもが刺激となり、啓司の下半身は即座に熱を帯び、抑えが効かなくなる。家を出る前に何度も処理しても、美桜の前では理性など役に立たなかった。

仕事中心であろうと関係なく、欲望は昂り、彼を苦しめる。

結局、啓司はトイレへ駆け込むしかなかった。

鍵をかけ、肩で息をしながら情けなく自身をしごく。

「……………つくそ……………」

吐き出すたび、胸の奥が重く沈んでいく。

虚しさに心が潰れそうになりながらも、処理しなければ仕事に戻れない。

そんな自分に嫌悪しながらトイレから戻っても、美桜は笑顔で声をかけてくる。

何も知らず、無邪気に接してくる態度。

それがかえって啓司を追い詰めていった。

(……美桜のせいじゃない。わかってる……)

頭では理解していても、昂ぶりと罪悪感が心を掻き乱す。

その結果、関係のないところで美桜に怒鳴ることが増えていった。

「なんでこんな簡単なこともできないんだ！」

「何度言わせるんだよ！」

美桜は一瞬だけ驚いたように目を丸くする。

だがすぐに困ったような笑顔を見せ、軽く言った。

「はいはい、また啓司さんイライラしちゃって」

受け流そうとしてくれているのは分かっていた。

しかし、その笑顔がかえって胸を締めつける。

(……俺は何をやっているんだ……)

欲望に振り回され、仕事も関係も壊している。

美桜の声も、笑顔も、次第に遠ざかっていく。

打ち上げの席で酒を飲んだ啓司は、酔いの回った体を助手席に沈めていた。

男性ドライバーを頼んでいたはずなのに都合がつかず、結局ハンドルを握っているのは森山美桜だった。

その事実には、啓司は思わず顔を歪める。

運転席の美桜は、いつもの調子で明るい声を上げる。

「ふあ、楽しかったですね。スタッフさんたち、みんな啓司さんのこと好きなんだなあって思いました」

「……そうか」

「そうですよ。もっと自信持つてくださいよ」

からりとした声は、救いのように耳に届いた。

だが啓司はうなずくだけで、それ以上言葉を続けられない。

シートベルトに押しつけられる下半身が、すでに痛いほど張りつめていたからだ。

（……早く家に着いてくれ……）

隣で笑う横顔を目にするたび、股間に熱が集まり、どうしようもなくなる。

視線を窓の外に固定し、ひたすら時間が過ぎるのを待つしかなかった。

やがて沈黙が続きすぎたことに気づいたのか、美桜の声色が変わった。

「どうして、最近そんなに冷たいんですか？」

驚いて横を向くと、美桜は小さく唇を噛んでいた。

「私が……こないだ焼肉ガツガツ食べたから？　女の子らしくなかったから？」

震える声。目尻にはうっすら涙が浮かんでいる。

「それとも……音源間違って局に送っちゃったの、まだ怒ってますか……？」

いつも明るく振る舞う彼女が、耐えきれず泣き出していた。

その姿に、啓司の胸の奥はきりきりと痛む。

「……ちがう」

喉が詰まり、言葉にならない。

どうしても口に出せず、黙り込む自分が情けなくてたまらなかった。

（……けど、もう隠すのは無理だ……）

酔いと罪悪感が背中を押す。

啓司はようやく意を決して口を開いた。

「……怖がらないで聞いてくれ……。俺、美桜と一緒にいると……勃つんだ」
その瞬間、美桜の肩がぴくりと震えた。

「……え？」

「……ここ何年もずっと勃たなくて……彼女にもそれで振られてき……。もう一生できねえんだろうなって思ってた。……でも美桜といると、別に何かされたわけじゃないのに、勝手に……。だから仕事にならなくて。避けるしかなかったんだよ」
自分で言葉にしながら、啓司の背筋に冷たい汗が伝う。

美桜は信じられないものを見るような瞳で彼を見つめていた。

「……ごめんな。き、気持ち悪いよな。こんなおっさんに急に勃つとか言われて……セクハラだよな」

車内に響くのは、ワイパーの規則的な音だけだった。

やがてガレージに車が滑り込み、重たい沈黙だけが残った。

シートベルトを外しながら、啓司はかすれ声で口を開く。

「……さっきは、本当に気持ち悪いこと言つて悪かった」

美桜は正面を向いたまま、何も答えない。

「……ちゃんと病院に行くから。とにかく勘違いするなよ。美桜が嫌いとか、仕事ぶりに不満があるとか、そういうことじゃないから」

必死に言葉を探すが、うまく伝わっている手応えはなかった。

逃げるしかないドアノブに手をかけたその瞬間――。

「……っ」

袖口をきゅっと掴まれる。

振り返ると、美桜の瞳が真っ直ぐに啓司を射抜いていた。

「それって……私のせいなら、治すの、マネージャーの仕事ですよ？」

心臓が大きく跳ね上がる。想定もしなかった返答。

冗談に聞こえない。美桜は本気でそう思っている顔をしていた。

啓司の頭は真っ白になり、次の言葉を失っていた。

あまりにも健気で、可哀想で——胸がきゅっと締めつけられる。

「こんなおっさんに」「もう病院に行くから」なんて、自分を卑下するように言う啓司さん。

嫌われていたわけじゃなかった。

仕事ぶりに不満があったわけでもなかった。

ただ、それだけのことに、どうしようもない安堵と熱いものが込み上げてきた。気づけば、私は勝手に手を伸ばしていた。

震える指で袖を掴み、彼を引き止める。

「……私の、お仕事です」

自分でも驚くほどはつきりした声。

そのまま、ズボンの膨らみに指先をそつと這わせる。

——布越しなのに、はつきり分かる。

びっくりするほど大きく、硬く張りつめていた。

（……おじさんなんて信じられない。今までで一番、大きくて、硬い……）

「……美桜、やめろ……そんなこと、させられない……」

弱々しく、申し訳なさそうに響く声。

その響きが、かえって胸を痛ませた。

「……嫌じゃないです。私が……したいんです」

そう告げた瞬間、迷いは消えた。

ファスナーを下ろし、熱を帯びた肉棒を取り出す。

脈打つごとに手のひらに伝わる熱。

存在感があまりに強烈で、胸の奥まで痺れるよう。

「……すごい……」

そつと唇を押し当てる。

先端に触れた瞬間、大きくびくんと震えた。

まるで、ずっと我慢していた少年のように。

「んっ……んむ……」

舌尖で先端をゆっくり舐め回す。

塩気と熱が広がり、頬が自然と赤く染まっていく。

両手で根元を包み込み、少しずつ口の奥へ迎え入れる。

「ん……………ふ、う……………」

唇を押し広げられ、喉の奥まで届きそうになる。

苦しいはずなのに、不思議と嫌ではなかった。

むしろ、これで彼が少しでも救われるなら――。

それが「マネージャーの仕事」だと、心から思えた。

車内に淫らな水音が響く。

ぐちゅっ、じゅぷっ……………と、私の口が卑猥な音を立てている。

「……………美桜……………だめだ、もう……………っ」

必死に耐える声。それでも私は止まらない。

裏筋を舌でなぞり、唇で強く吸い上げるたび、

啓司さんの腰がびくびくと震える。

(……大丈夫。私が全部、受け止めますから……)

心の中で誓った瞬間――。

「……………くっ……………あぁっ！」

啓司さんの全身が跳ね、熱い奔流が口内へ一気に溢れ込む。

驚くほど濃く、熱く、止めどなく吐き出される精液。

「んっ……………んむ……………っ……………んく……………っ……………」

涙がにじむほど苦しいのに、必死に喉を鳴らし、こぼさないように飲み込む。

最後の一滴まで吸い取り、「ぐくっ」と音を立てて飲み下す。

胸の奥に、じんわりとした達成感が広がった。

顔を上げると、困惑と罪悪感の入り混じった表情で私を見つめる啓司さん。

口元に残った雫を舌で拭い、私は微笑んだ。

「……………大丈夫です。啓司さん。これも……………私の仕事ですから」

——それから美桜は、啓司の勃起を「管理」するようになった。

本当なら、自分がそばにいないければいい。

だがマネージャーである以上、彼の傍を離れるわけにはいかなかった。

啓司は、本当にすぐに勃起してしまう。

そのたびに申し訳なさそうに視線を逸らし、「……ごめんな」と小さく呟く。

その姿があまりにも健気で、切なくて、放っておくことなどできなかった。

美桜は人目のない場所を見つけては、さっと膝をつき口で処理するようになった。

「……んっ……んむ……っ……」

先端を咥えると、啓司は必ず困ったように眉を寄せる。

「……自分でやるからいいよ」

そう言うのが常だった。